

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社欄宣



第十一回 『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』(前編)

「一行の驚くほどに物柔らかな挙措、礼儀正しさが、周囲の全員に強い感銘を与えた」

今回はいつもとちよつと視点を変えてみます。文久元年(一八六二年)に幕府の命を受けて、日本の使節団がヨーロッパの国々を訪問した際に、日本人がヨーロッパの人々にどう見られたかという研究があります。その研究書の一つ、『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』(鈴木建夫、ポール・スノードン、ギュンター・ツォーベル共著)から紹介したいと思います。ヨーロッパに日本人がやってくるのは、仙台藩主伊達政宗が家臣の支倉常長を

派遣した慶長遣欧使節以来、二百五十年ぶりのことでした。「エキゾチズム」に憧れていた当時のヨーロッパの人々にとっては、王室や官僚といった高いレベルだけでなく一般国民の間でも、とても関心の高い出来事だったようです。

一般にはあまり知られていませんが、幕府が幕末に諸外国へ派遣した使節団は、万延元年(一八六〇年)に咸臨丸が護衛した遣米使節派遣に始まり、ヨーロッパへは文久遣欧使節を皮切りに、六〇七年

の間に全六回の使節団を派遣しています。

この文久遣欧使節とは、幕府がオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの修好通商条約(一八五八年)で約束した新潟、兵庫の開港と江戸、大阪の開市の延期交渉、ロシアとの樺太国境画定交渉のため、ヨーロッパに派遣した最初の使節団です。

ちなみに、この使節団がヨーロッパに派遣される背景には、前回ご紹介したオールドコックの強い勧めがありました。

その後、使節団は約一年間の旅程でイギリス、プロイセン、ロシアなどを訪問し、条約の交渉はもちろんのこと、文化や産業、軍事施設や病院など、ありとあらゆる視察をしています。その様子を当時の各国のメディアが報じていますが、総じて日本人は「好奇心に富み知的な国民」で、「決して情報不足ではなく」「器用で真似がうまい」と褒められ、使節団については、みな「謹厳で真面目で、身綺麗で、物事を辛抱強く調査し、調査の結果を丹念に書き留めている」と絶賛されています。そんな日本人を一目見ようと、行く先々でたくさんの聴衆に囲まれていた様子も報じられています。

では、使節団がヨーロッパの人々にどう見られたかについて、具体的に紹介し

ましょう。

イギリスのメディアは、ロンドン万博の開会式に出席した使節団について、次のように報じました。

「日本人は中国人にそっくりだが、日本人のほうが遥かに威厳があり、遥かに正直そうに見える。日本人の表情は生真面目だが陰気ではなく、知的ではあるが狡さがない。……ニヤニヤしたりお喋りをしたりせず、近くにいた者を指で差したり、絨毯の隅をめくったりはしない。……遠くの異国からやってきた施設の非常に多くの者がそうしたのを、われわれは見たのだが。日本人使節は開会式を、終始、冷静で、礼儀正しくて、うやうやしく、かつ威厳のある態度で見守り、互いに何度も言葉を交わしていたことからわかるように周囲に強い関心を示したが、下品な好奇心をあらわにすることは卑しんだ」と。

また、宿泊したロンドンのホテルの様子もこう伝えました。

「一行の驚くほどに物柔らかな挙措、礼儀正しさ……が、周囲の全員に強い感銘を与えた。……すでに一行の多くはいくつかのよく使われる言葉や表現を聞き覚え、なんとか意を通じている。一行の方は英和辞典をもっていて、熱心に勉強している。……今ではイギリスでの生活にすっかり慣れ……箸を使うのをやめて

いて……イギリス紳士とほとんど変わらない」と。

一方、プロイセンにおいても、国王ヴイルヘルム一世に謁見した際の様子を地元メディアはこう伝えました。

「玉座の間近に立つ四人の使者は、使節の長と高官であるようであり、彼らの衣服は立派で、非常に精巧な織物である」「頭には彼ら独特の帽子を被り、位を表示する多種多様な記章〔紋〕のついた官服を着ていた」

また、ヴィクトリア劇場での日本使節滞在を歓迎しての軍楽隊のコンサートでも、「彼らの態度は、懇懇で、つつましく、自然であった」そうで、「高位の使節は、非常に控えめな態度であったが、若い随員のなかには、オペラグラスをのぞいて場内にあからさまな関心を示めたものもいた」と、微笑ましい一面があったことも報じています。

さらには、ロンドンにも駐在していたプロイセン公使ブランデンブルク伯に至っては、使節団の見識と理解力を誉めたたえ、「態度、振る舞いは最良の社会に住む人間のそれであり、優美な礼儀作法でヨーロッパの慣習に倣っており、非常に控えめではあるがすべてに注意深い」と、絶賛しています。

このように、ヨーロッパの各所で絶賛された使節団総勢三十八名のメンバーたちとは、どのような人々だったのでしょうか。

芳賀徹著『大君の使節』には、使節団の正使(特命全権公使)の竹内下野守保徳について、「温良の徳、自ら容貌に露れ、物に騒がざる君子風の良吏」「莊重犯すべからざるの色あり、天晴れ使節よといふべき相貌」と他のメンバーから評されるほど包容力があり、幕府の代表として相応しい人物だったと書かれています。

また、副使の松平石見守康直について、フランスの初代駐日公使ベルクールは「いささか口数は多いが、その廉直な性格と妥協の精神によって、在神奈川の外交団のあいだにきわめてよい印象を残した。若くて、聡明で、機敏なひとだ」と書き残しています。

メンバーの中には、福沢諭吉のように、典型的な知識人も何名かいました。英語に堪能な者や松木弘安(のちの外務卿寺島宗則)のような医師もいて、平均してなかなか知的教養レベルの高い、幕末武士のエリート的集団でした。

幕府としても、日本国を代表して送った使節であることはもちろんですが、開国後の難局を乗り越えるため、次代を託せるメンバーを厳選したことが窺えますね。